

暮らしの



ユーモラスな表情のだいたい色の植物は、ナス科のフォックスフェイス。赤い唐辛子と青色に加工したツツジの強烈なコントラストの下から、大輪のカサブランカが顔をのぞかせる。福岡市・天神の地下スペースで開かれた展示会。素材と色彩の鮮やかで大胆な組み合わせが、買い物客の足を引き留めた。

「現代の生活環境に合った色づかいや色合わせを楽しみたい」。華道家、後藤晃毅さんはまだ27歳。作品はポップでモダン。華道の世界に清新な風を吹き込む新鋭だ。



「花には最も美しい角度がある。それは、太陽の方向をまっすぐ見ている状態。だから、ぼくは見ている人を太陽に見立てて花を生けたんです」。展示場では、ハサミを手にいくたびも作品の構成や角度を確認し、アレンジした。

障害物にぶつかり、風に曲げられても、花は太陽に向か

1982年、福岡市生まれ。華道草真流の二代家元、寛徹氏の長男。福岡教育大で美術教育を学び卒業後、本格的に華道の道へ。「福岡国際蘭展」や「全日本いけばなコンクール」などで受賞多数。草真流家元道場＝092(822)2676。

後藤 晃毅さん (福岡市早良区)

華道家



季節と展示空間を考慮して、よりあざやかな構図を生み出していく



①ラン科の素材とミニトマトを組み合わせた作品②手製の花器にオーソガラムとキクをあしらった



ポップでモダン 新風求め

とを旨とし、「人と自然の和」と人の和と「花の和」を重んじる草真流の哲学は、幼いころから繰り返しの説かれ、体に染み付いている。福岡教育大時代に華道家の道を本格的に意識しはじめた。美術の教師免許を取得する傍ら、花器の創作を手掛け、残る芸術である園芸と異なり、華道が瞬間の芸術である

「花を生けることはマスを埋める作業ではなく、余白をいかに見るかという」と「空間のゆとりは、見る人の心地よさにつながるんです」。華道の神髄を語る言葉には果てがない。だが、福岡市・天神や早良区巨道の教室などで生け花を教える時に繰り返して強調するのは「水をまめにかえる、器をきれいに洗う」といった基本の重視」という。その姿勢は凛とした暮らしの在り方に直結する。

つて咲く。草花に思づく太陽への指向、そんな「生命の声」を意識することは、師匠であ

る祖父や父から受け継いだ信念だ。祖父が創始した華道「草真

流」の三代目。「花形から美を求めるのではなく、植物のもっている美を引き出すこ

ることをあらためて知った。「花を触ると水分や弾力、温度などの状態が即座に伝わ

ることをあらためて知った。現代生活にもっと寄り添った華道を。若き華道家の精進の日々は続く。(平原奈央子)

